

## 基町／相生通り（通称「原爆スラム」）調査を回想する〈前編〉

石丸紀興 千葉桂司 矢野正和 山下和也

### 1 はじめに

平成 24（2012）年 4 月のよく晴れた休日、私たちは相生橋のたもとから太田川（本川）に沿って咲きほこる桜並木と、新緑にまぶしい相生通りの河川敷を北に歩いた。

青々と芽吹いた河川敷の芝生には、多くの家族連れで賑わう姿が見えた。子供たちが遊びまわり、見守る大人たちはシートの上に寝そべり、川面からそよぐ爽やかな風に心地よさそうにくつろぐ。

半世紀前、今からは想像もつかない風景がそこにあった。ここに遊ぶ人たちは知らないであろうが、かつてこの地に、1 千戸を超えるバラック住宅がひしめきあう「原爆スラム」と呼ばれる街があった。間違いなくそこに生活する人たちや家々や通りの姿があったのである。約 40 年前、私たちは、その消滅した街を記録すべく、炎天下を毎日この土手筋に通ったのだった。

この報告は、昭和 45（1970）年夏から秋にかけて行った、撤去直前の「基町／相生通り（通称原爆スラム）」の実態調査と、その約 10 年後の昭和 54（1979）年に、かつての「基町／相生通り」居住者たちに対して行った追跡調査を、半世紀近い時を経て振り返り、消滅した街の意味を改めて考察すると共に、今日の思いを述べるものである。



写真 1 現在の太田川（本川）河川敷

### 2 なぜ「基町／相生通り」を取り上げたか

#### 1) 「原爆スラム」と呼ばれる街があった（原爆スラム略史）

広島市の中心部、原爆ドームの北、相生橋から空鞆橋を経て三篠橋に至る太田川（本川）の左岸に、弓なりに延びる南北約 1.5 km の土手筋の道は、かつて「相生通り」と呼ばれていた<sup>1</sup>。この道に沿って昭和 20（1945）年の被爆後から昭和 50（1975）年頃にかけて、1 千戸ほどのバラック住宅が密集して建ち並んでいた。この地区が通称「原爆スラム」と呼ばれた街である。

ここで、広島における基町地区の位置とその変容過程について簡単に触れておこう。基町地区といえば、築城以来、本丸、天守閣、二の丸等の城を中心として内堀、中堀、外堀、さらには家臣団の住まいを加えた城下町広島のとてであった。明治維新後そこは次第に軍事機能を強め、軍都の中枢が形成された。そして、被爆により人的、物的にも著しい被害を蒙った基町地区は、戦後 70ha を超える面積の中央公園としての地区指定・性格付けされたが、

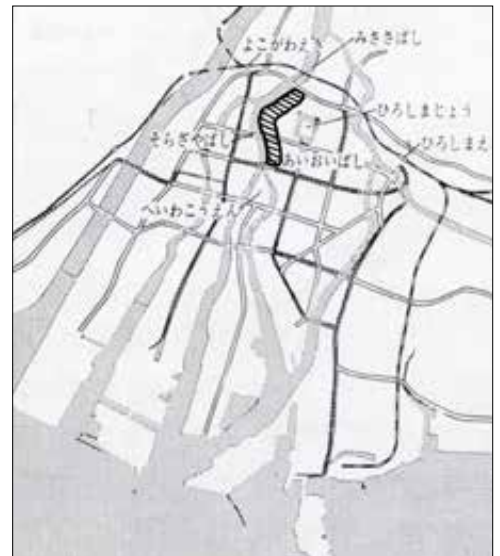


図 1 位置図

一方では応急的な住宅が公的に建設され、またその一画は官庁街やスポーツ施設としても形成された。こうして基町地区は最もその時代をリードするような役割を果たしてきたが、やがて公園用地に指定された地区に建設

された住宅の老朽化、さらには基町地区の最西部の河岸に形成された住宅群の扱いが、広島復興過程最後で最大の課題として浮上してくるのであった。つまり、基町地区には政策的に公的に形成された住宅地と、自然発生的にある意味では不法に形成された住宅地が、隣接して存在していたのである。

軍都広島の中核機能を担った基町地区一带は、被爆・敗戦とともに人々の住むところと変じた。被爆都市広島の後史を赤裸々に語ってきたヒロシマのもう一つの顔であった。



写真 2 昭和 45 年頃の基町／相生通り地区（商工会議所屋上から北を望む）

## 2) 原爆とスラムを背負う街として

基町／相生通り地区は、二つの側面を象徴する街であった。

一つは、発生の起因が、原爆投下による都市の壊滅であったということである。広島は一瞬にして全域が廃墟となり、生死をさ迷った市民に安住の地はなく、最初に雨風を凌ぐ場所はみなバラック建てであった。相生通りの土手に発生したバラックもそれと変わることはない。市内にあった数箇所の河川敷バラック地区のうち、爆心地に最も近く、最後まで残った市内最大の不良住宅地区であるがゆえに、「原爆スラム」の名称が付けられ、被爆の象徴の 1 つとなった。

昭和 45 年の調査時点では、居住者の被爆割合が市内に比べ特段に多いものではなかった。にも関わらず昭和 38（1963）年頃に「原爆スラム」と名付けられたことには別の思惑があった。それは基町地区の復興事業促進のために行政・居住者双方にとって必要な名前でもあったからである。

もう一つは、戦後の社会の都市問題、住宅問題の集積したエリアの象徴という側面である。敗戦後、こうした地区の発生は被災を受けた多くの都市に共通していたが、当地区は市内の戦災復興事業による、他所からの立ち退き者や、貧困や差別といった経済的社会的弱者の集積した街となった。市民全てが被爆者であり罹災者でありながら、土地・家屋・財産を持たざる者として、戦後の長い復興の過程に置き去りにされ、経済的恩恵を受けなかった人たちの住む街だけが「スラム」と呼ばれ、存在し続けることになったのである。

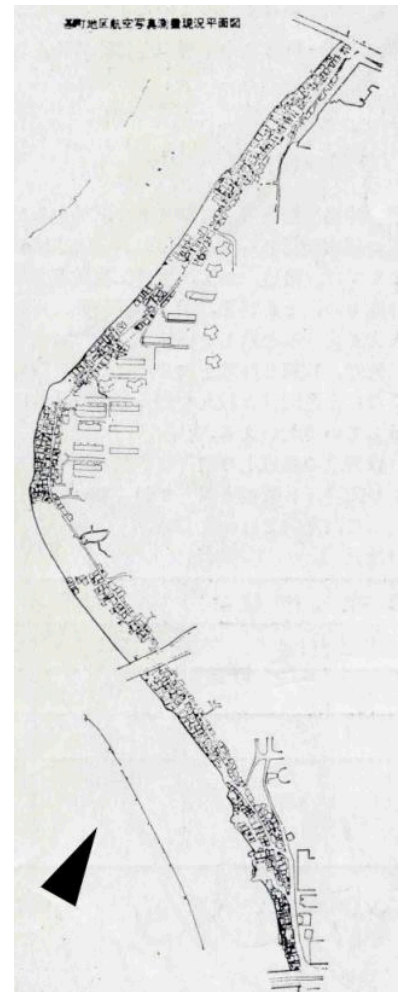


図 2 全体図

## 3) 変容しつつ撤去を待つ街

ヒロシマでは生者もまた死者に劣らず悲惨であった。相生の土手でも同様であった。すすきや笹やぶに覆われた土手にぽつぽつとバラック小屋が建ち並び始め、昭和 25（1950）年頃には不法住宅 64 戸<sup>2</sup>、河川敷一帯の住宅は 100 戸を超える状況であった。

当初は被爆者たちが集まっていたが、戦後の都市化による未曾有の住宅不足と、復興事業に伴う土地区画整理等が原因となって街を追われ、ここにやってくる人たちが増えた。相生通りは「被爆」と「社会・都市政策、住宅政策の貧困」という二重の意味を持つ街に変わった。当地区に付けられた「原爆スラム」という呼称は、実はそうした地区を作り上げていった「出発点」と「過程」を如実に示す言葉でもあったのである。

昭和 40（1965）年頃、市内の復興土地区画整理事業も大詰めに近づいていた。いよいよ市内河岸のあちこちにあった不法建物の撤去が始まり、最後まで残ったのが基町／相生通り地区であった。

「この地区の改善なくして広島戦後は終わらない」とする広島県と広島市は、まず公的に建設され老朽化した住宅を対象とする再開発を目指して模索を始めた。そして、これに相生通りを含めた再開発とするよう、地元住民を中心とした強力な運動が進められた。昭和 41（1966）年には建設省への陳情により一定の方向性が確認された。そうして昭和 43（1968）年には、基町団地及び長寿園団地の基本計画を策定し、住宅地区改良法の地区指定を受けるための調査を行った。そして翌年の昭和 44（1969）年 3 月 18 日「広島市基町地区」は改良地区に指定された。同年から不良住宅の除却と高層アパート建設を目的とした基町再開発事業が始まり、基町・長寿園で第 1 期工事が着手され、いよいよ基町／相生通り地区のバラック撤去が始まろうとしていた。



写真 3 昭和 45 年の基町／相生通り地区

#### 4) 取り上げた動機と背景

こうした基町をめぐる状況下で、私たちは「基町／相生通り（通称原爆スラム）実態調査」に取り組むことを決意した。直接の動機は「この街の撤去」であったことに間違いはないが、さらに昭和 40 年代の激動する時代背景が大きく動機付けに影響したことに触れておかなければならない。

その一つには、なんとといっても昭和 44 年当時、日本中を席卷した大学紛争（闘争）がある。私たちの通う広島大学にあっても、研究や大学の在り方を巡って熱い論議が繰り返され、そうした問題意識に私たちは大きく触発された。そこで、建築と社会がクロスオーバーする実践的な研究をしたいという思いから、「戦後都市・広島」と「ヒロシマ」に関わるテーマを探した。

二つ目は、建築系学徒として建築・都市計画への関心から、相生通りの土地の所有権を持たない（つまり不法占拠した）者の住宅・街の形成と空間構造に興味をそそられた点がある。

こうした模索のなかで、私たちは研究テーマを絞り、学生・院生 3 人<sup>3</sup>による調査チームが生まれたのである。

#### 5) 今しかできない調査

昭和 42（1967）年、原爆問題とスラム問題が唯一交差する街として、大阪市立大学の調査団（代表大藪寿一教授（当時））が先行してこの街の調査に入っていた。それは都市社会学、都市病理学の視点からの調査であった<sup>4</sup>。私たちはそれとは違う視点、つまり都市計画学、都市住宅学からのアプローチを試みようとした。

当時の私たちにとって、原爆スラムと呼ばれていたこの地区は、正直言って物理的にも精神的にも異空間であった。しかし、ヒロシマー原爆スラムー基町再開発という一連の



写真 4 昭和 42 年の土手筋の道：相生通り

つながりの中で、当該地区の調査は「今を置いて記録採取は不可能になる」という思いから、図面採取を中心とした悉皆調査（全世帯全戸調査）を私たちは選択した。

こうして、①この街が存在したことをきちんと記録にとどめること、②この街に住む人と暮らしの実態を把握し、また、どのように街が維持されたのかを探ること（住まいとコミュニティなど）、そして③「スラム」と呼ばれる高密度な集住形態が形成された過程と、暮らしが営まれた生活空間の構造を発見すること、を目指そうとした。

### 3 調査はどのように進んだか（昭和 45 年実態調査）

#### 1) 実測採取と聞き取りを優先

街の物的記録を残すことを優先し、あわせてその空間構造と社会構造の大きく 2 点を把握すべく、以下三つの方法を取った。

一つ目は、「いえとまちの実測記録を取る」ため、各戸の図面を採取し、あわせて各戸の家具配置の採取と住まい方（食事や就寝方法など）をヒヤリングすること、二つ目は、定時定点観測により「街の使われ方の実態を把握する」ため、外部空間（通りや路地、ひろばなど）の使われ方を、大人や子供の生活行動を通して観測すること、そして三つ目は、「居住者の構造と意識、コミュニティの実態を把握する」ため、個別のアンケート・ヒヤリングや寄り合いインタビューにより証言記録として採集することである。

こうして、相生通りを挟んで連なる家々を戸別訪問し、巻き尺で測って間取りを図面化する作業と、生活の実状を聞き取る作業、地区内での人びとの暮らしを、子供の遊びや大人の近所付き合いを図上にプロットする作業など、真夏の炎天下、フィールドワークは始まったのである。

#### 2) 苦渋の悉皆調査と助っ人

最初は私たち 3 人だけで、間取りを測る作業と、アンケート項目についてその場で聞き取る作業を同時に進めていた。分担するとはいえこの複数作業は、想像以上に大変な作業であることがすぐに理解できた。私たちは若さから飛び込んだ無謀ともいえる悉皆調査を悔やんだが、もはや後戻りはできない。あわてて応援を求めに走った。幸いに他大学や学科後輩の応援を受けることができ、途中から総勢 10 数名のグループになっていた。この人たちの応援がなければ、この調査は不可能であったに違いない。

調査は、2～3 人のグループで手分けして取り組むのだが、午前中 1 軒、午後 2 軒がどう頑張っても 1 グループでできる限界であった。家の形は複雑で、その都度推し量りながらの作業が連日続く一方で、思いの丈を語る住民のヒヤリングはなかなかかどらなかつた。

### 4 相生通りには、どのような人たちが住み、どんな暮らしがあったか

#### 昭和 45 年実態調査「もとまちノート」から

今は整備され河岸緑地となったかつての土手道に立ち、45 年も前に 3 か月をかけて調査した街を想像するのは難しい。しかし私たちの記憶には今でも生々しく留まっている。調査をとおして直に触れたあの家族や家々、路地、人々と交わした会話、子供たちの遊ぶ姿、くつろぐ大人たち…。それらは被爆を契機として、その後の社会経済の変動の中で職を求め住みかを求めてやってきた人たちが、都心の川べりの国有地に繰り広げた、た



図 3 家屋配置詳細図（地区南側、相生橋北側の例）

ゆまな暮らしの断片である。ここでは、採取時に聴き取った生の声を、記録した2つのノートから追ってみたいと思う。

### 1) 調査で出会った人たち（もとまちノートから）

以下の記述は、昭和45年夏8月4日～10月下旬、住戸の間取り・アンケート調査で訪れたその日、記憶が薄れないうちにとメンバーの1人が「もとまちノート」と称して書き残したものである。相生通りの街を作り上げた人々、そこに住んでいた人々の実状・心情の一端を想像してもらうため、長い時は経ているがこうして記すものである。データによる様々な分析は別に譲って、いくつかの具体的な声を「そこで出会った人たち」の言葉で紹介してみたい。（注）は今回補足のため追記したもの

準備に手間取り、現地の調査に入れたのは暑い陽射しの8月4日であった。私たち3人で行った最初の調査場所は、相生橋から少し北に上がった、かつて相生通りと呼ばれていた土手筋の通りに面した縫製業を営む家からであった。

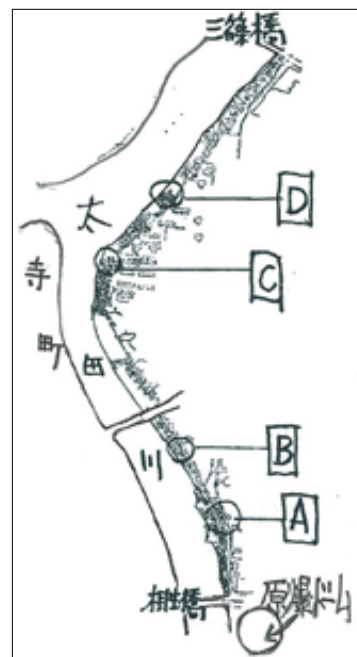


図4 調査した事例の位置図  
\*図5、7、9、11は地区の詳細図  
①～⑦は事例の番号を示す

#### 事例①：淡々と生活状況を話してくれた縫製業（応接椅子のカバーづくり）の家族（8月4日）

どんな反応が返ってくるか、少しばかりの不安も「お父さん」の声の感じで消え去った。奥の部屋で娘さん（23才）がテレビを見ていた。「おい、その障子を閉めとけ。…あっ、いやー開けてあげー」間取りの測量は進行中で、二人が柱間隔を測って図面に落としている。京都から長男（26才）が帰ってきていた。私はヒヤリング、お母さんは病身だそうで途中から子供二人に頼んだ。ポツポツ二人で話しながら記入している。

「原爆は受けられているんですか」父「ええ、4人が受けています」静かな会話だった。私は無我夢中である。国籍は外国である。「二人でミシンを踏んでおられるんですか」父「はあー、応接椅子のカバーを作とります」真白いカバーが板間に重ねられていた。ミシンが90度方向に開いて…。57才と47才の夫と妻の労働の場所である。途中でカバーの布の切れ端を四角に切って「これで汗を拭きなさい」と渡してくれた。夢中だったのでよくわからなかったが、この人の心の柔らかさを感じた。台所の窓際に油絵の描きかけが横にして置いてあった。その前に行って首を90度にしてじっと見た。井戸端に3～4人の女の人が頭からすっぽり布をかぶって立っている。水汲みの風景…足もとまでの紫・朱の布がきれいで何か拵りのある祈りの構成である。

娘さんが最後に出してくれた麦茶、冷たくさわやかにどこかにしみわたった。「基町アパートには入りたくないですねー、



図5 位置図A（事例①、②）

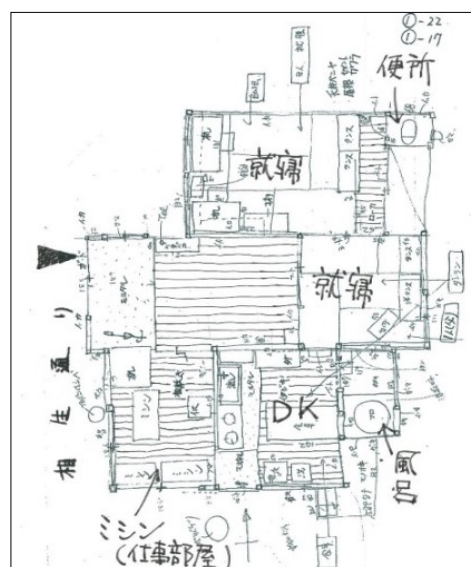


図6（事例①）縫製業の家

できれば改築してこのまま永住したいです」淡々と語った「お父さん」の言葉が耳に残る。

(注) 被爆世帯で外国籍。仕事は自営業で、住宅地区改良法が主に住宅が対象であること、当時店舗移転計画が定かでなかったこともあり、このまま再開発高層アパートに移れそうもなかった。

事例一②：相生通りに面して子供相手に駄菓子屋をしていたおばさん (8月4日)

「いつ増築したか、私は覚えとりませんよ。ずいぶん前のことじゃけえ、こうして聞かれるんなら覚えとるんじゃったんですがねー。わたしや、覚えとりませんよ」「基町アパートねー、行け言われるところへ行きますよ。そりゃーここにおるのが、仕事のうえでいいんですが、入れてくれさえすれば入りますよ」なぜかふたつの言葉の中に、その人の気が付かないかもしれない微妙さを感じた。

その人も被爆者で特別手帳を持っている。今は駄菓子屋さんでかき氷もあった。「このテーブルは何ですか」「あー、それはお好み焼きですよ。以前やってたんです」間取りは複雑である。自らが工夫して作り上げた生活者の持つ単純な複雑さ…。かき氷を3人で食べて帰ろうかと思ったが、時間の余裕なしで残念、ザンネン…おばさん、すみません。

(注) 調査の合間にみんなで何度かかき氷を食べに行った。事例一①でも述べたように、こうした零細店舗は高層アパート移転後は、店は続けられそうもない。被爆者、単身者。

事例一③：床に臥せてそれでもつらい話を聞かせてくれたおじいさん (8月11日)

うす暗い家をたずねた。奥(と言っても玄関から見える一間しかないのだが、なぜか奥の感じがする。)の部屋に40～50才くらいの男の人が寝ていた。病气らしい。その人に近所に住んでいるはずの一組の親子のことをたずねた。「その人たちはもうここにいませんよ。親が子を置いて逃げましてねー。わたし、その子を10日ばかりここにおいたんですが、何しろ責任が持てません。〇〇〇園に今はいるはずですよ。2年も前のことですよ」

その間、苦しい喉の引きつりが続く。暗い部屋だ。寂しい部屋だ。「フラフラ酔ったようですよ。酒じゃありませんよ。注射打ってもらってもよくなりません」

スラム・・・原爆・・・わからなくなってきた。地区の人たちはほとんど心が柔らかくていい人たちだ。ただ奥の奥のほうで何かが屈折している。何かが壊れてしまっている。そうしてこうして調査している自分も、本音のところではわからない。ただ言えることは、調査するという行動だけだ。3か月かかってもしっくりやりあげるつもりだ。今日の混乱は心にしまって、さあ元気にやらなくては…。(私は基町の裏と表を同時にみてわからなくなった状態である)

(注) ここはFアパートの一室、無職で生活保護を受けている。相生通り地区には高齢の単身者が多い。57人(約15%)は単身者であった。

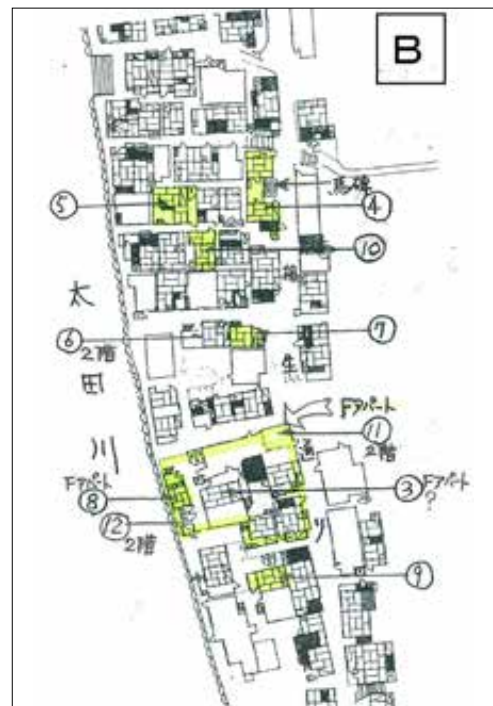


図7 位置図B (事例③～⑩)

事例一④：冷たい麦茶を黙って渡してくれた中学生 馬碑のある家 (8月12日)

両親と3人の子供、炊事場と二つの部屋、2段ベッドが置いてある。中学2年の男の子が1人だけ家にいた。「君、今日は野球の練習、行かないの」「今日はクラブ、休み」「中学卒業したらどうするの。姉さん、

兄さんは働いたんだね」「高校、行くよ」それを聞いて何となく安心した。

汗かきながら間取りを取っていると、黙って冷たい麦茶を渡してくれた。最初にあった疑いのまなざしは消えていた。その麦茶のととてもおいしかったこと…山で飲む水みたいだった。

（注）相生通りに面して、元西練兵場にあった馬碑が残っており、それを三方から取り囲むように建てられた家。馬碑は今では三篠橋付近に移設されている。なおこの付近、昭和37(1962)年6月に29世帯122人が火事で被災、その後復興したため家の並びが整然としている。

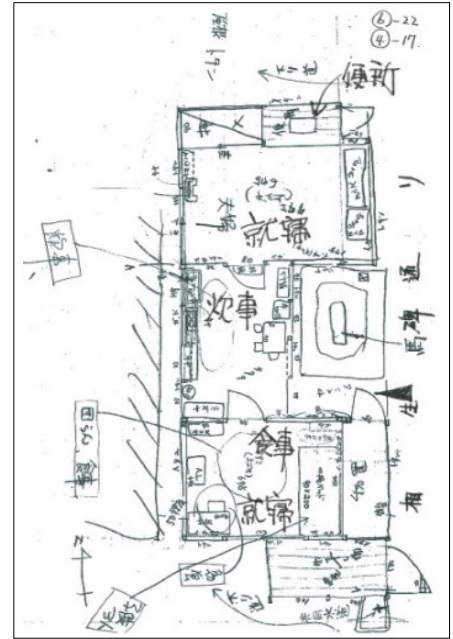


図8（事例一④）馬碑のある家

事例一⑤：片言の日本語を話すおばあさん（8月13日）

午前10時半、62才の女性、最初話して返ってくる答えがおかしい。その人、途中で誰かを呼びに行く。私の話す日本語がわからないのだ。平気で「てっきょ」なんて言葉を使う感覚だから、こんな時困るのだ。

その人は今は一人、長男夫婦とお孫さんが名古屋にいるらしい。21才で日本に来たという。以来40年…どんな生活だったか…今、彼女が日本語もよくわからない状態で、字も読めない状態でたどたどしい言葉で私の相手をしている今、「大変ですねー、一軒一軒、体がだめになりますよ」「えー、明日から3日間、家に帰ってたくさん食べてきます」

そして出る時、深く礼をして「ありがとうございました」と言うと、その人も畳の上に座ったまま礼をして「ありがとうございました」と言った。

（注）昭和の初め頃に来日。単身者。

8月14日から16日は盆休みのため、田舎へ帰省する。

事例一⑥：議論を誘ってきたハト小屋の親父さん（8月18日）

世帯主55才、妻27才、そして5才の男の子。すぐ家の中に入れてくれた。親父さんだけ家にいた。途中で「あんたらーこれを市や県に見せるんじゃないかろうの」とやわらかい調子で議論を誘った。アンケートの質問を少しずつ続けながら、そのことで話した。

「わしは鳩小屋を改造して、寝とるんで。ハトと同じじゃけんの一」子供も窓の外に増築してはね出した小さな空間に寝かせているとのこと。風呂には近所の人々も時々入りに来るとか。

昼になった。弁当の食事を始めた。いいと言うのでそのまま間取りを測った。のどが渇く。茶とすし、アンミツを出してくれた。食べながら、熱い茶を飲みながら、なんとかその人が出るという1時間前までは済ませた。ハト小屋の親父さんはタクシー運転手である。

（注）2階建て、この小さな家には2家族の間借り人がいる。

事例一⑦：父が入院中で二人の孫を育てていたおばあさん（8月18日）

祖母（66才）とお孫さん2人（中3女、中1男）の3人暮らしである。父は入院中で、母は子を残して別れたとのことだ。

調査の途中で雷が鳴って、空が暗くなり大粒の雨が降ってきた。中学1年の男の子がアンケート用紙と

にらめっこ、雨漏り、そのうち押し入れの中からふとんをひっぱり出しはじめる。窓際に雨が流れ込んでいる。その下に雑巾がちゃんと置いてある。

それにしても「お母さんはどうされたんですか」と意を決してたずねた時の、少し事情を話してくれたおばあさんの怒りを通りこした哀しみの目の色が忘れられない。…雷が激しく鳴る。なぜか心が波立つ。「今日はこれで帰ります。また明日アンケートを取りに来たとき、残りの間取りは取らせて下さい」

傘を借りて、ズボンをびしょ濡れにしながら相生通りを急いだ。

(注) 夫婦と子供という家族タイプが半数を占めるなかで、こうした家族にも出会った。祖母は被爆者、祖母と二人の孫は生活保護を受けている。

#### 事例⑧：転々とした挙句 1 軒の家が持ちたくてやってきたおじさん (8 月 26 日)

18 歳で沖縄を出て集団就職で本土 (山口県の人絹工場) へ渡ってきた。25 才のころ、沖縄へは一度帰ったきりだという。戦争中は船に乗って食料運搬の仕事をやっており、妻もめとらずずっと 1 人の生活が続いた。ここに来る直前は住込み店員だったが、7 か月の入院後、1 軒の家が持ちたくてやってきたという。1 人でさみしい時もあるが、今は気楽だという。たまらない時は、酒をたらふく飲んで 1 人で寝ているとのことだ。「戦争がなかったらこうはなっていなかったんですがね…。船に長く乗っていて頭がおかしくなったんですね…」 食器類は皆無…水差しだけでお茶もない。すべて外食とのことだ。1 日 1,500 円の廃品回収業で、月に 3 万円の収入…20 日働いて 10 日間は休むのだろう。

「どうもいろいろとお聞きしましてすみませんでした。どうぞお元気で…」戦争とオキナワ、1 人の生活…その中で気楽な生活者の孤独とあきらめと遊びの眼は、何を見てきたのだろう。

(注) ここは太田川 (本川) 沿いの F アパートの一階の一室。この上の 2 階が事例⑩に位置する。家の横に共同便所があった。水道・便所とも共用。

#### 事例⑨：日給アップの通知書を嬉しそうに見せてくれた親父さん (8 月 26 日)

日本では面白くないということで、25 才くらいで満州へ渡る。そこで妻子と死に別れて、35 才くらいで日本に帰ってくる (昭和 29 年)。その後およそ 7 年間山仕事や農業をやり、広島に出て土工としての飯場暮らしが続いた。作業中の事故で今はビルの清掃業だとのことだ。

7 月の給料の明細書を見せてくれた。出勤 31 日とある。1 日の休みもなく、午後 10 時から午前 2 時までの 4 時間労働「体重 60kg あったのが、55kg になり 50kg になり…。やっぱり 60kg ないと土工はできませんよ。土工の仕事はきついけど健康的でいいですよ」深夜の仕事はボーリング場のじゅうたんの掃除だとのこと…。窓は閉め切ってあってお客さんが帰ると冷房は完全ストップで、汗びっしょりになるとのことだ。午前 2 時に仕事を終えて食事をして眠るという。正午に起きてテレビを見たり洗濯をしたり風呂に入ったりで、午後 6 時前にもう 1 回食事をして少し眠り、10 時からの仕事に備えるという。これを 1 日も狂わすことなく繰り返す。

日給が 100 円アップして 900 円になったと言って、その通知書を少しうれしそうに見せてくれた。

(注) 借家、正確には借間住まい。水道・便所とも共用。単身者。

#### 事例⑩：相生通りの家を見た祖母の戸惑いをそのまま話してくれたおばさん (8 月 26 日)

昭和 27 年頃、相生通りに来る。周囲は家がちらほらで、北のほうはススキの原、南の半分は畑だったという。「危ないから夜は歩くまいね、言うと思ったですよ」「電車が通るのが、朝見えましたよ。家はちょっとしかなかったですからね」

昭和 37 年に火災にあう。その頃はもう家がびっしり建て込んでいたという。馬碑の北側から出火した



という。

「田舎の祖母が2年前に来たんですが、この家を見たとき、ケラケラ笑うんですよ。そして泣いてね。わたし、はよあがりんさい言うたんですよ。おばあちゃんが言うには、『今までこんなところに住んでいたんか思うとかわいそうになって』と…」

「子供の教育上よくないですね。親の浅知恵なんです、上の子だけは別に父のところへやって、そこで大きゅうしよういうて、この前話したんですよ」

（注）昭和37年6月の火事、その後復興。

8月28日（金）、31日（月）は地区内の子供の遊びや大人のつきあいなどの行動調査を行った。

事例一⑩：炭火で5合の飯を炊きかけていた廃品回収業の親父さん（9月1日）

元東洋工業の下請けに工員として勤めていたが、そこをやめて以来彼の言葉を借りれば「落ちるのは早い、あつという間ですよ。でもあがるのはなかなかですわ」。妻は亡くなったとか…途中グレて、そのとき1人娘が親戚に引き取られていったとか、「自分が悪いんじゃない、何も言えなかった」

廃品回収業…マツダの三輪で各地の小学校を回ったり、工場から出るものを一括引き取ったり…でもいつもは少しずつにしかならないという。昨日の伝票だと言って見せてくれたのには、約1万円の収益が記されていた。「鉄は宇品に集めて八幡製鉄に行く、紙は大阪、ぼろ布は金にはなりませんのー」

夏は2階で風通しが良く過ごしやすいかったが、冬までには隙間風を防ぎたいとのことだ。炭火で5合の飯が約20分で炊けるとか…。私が訪れたのでつきかけた火も消えていた。「明日もおるけん、昼休みには寄りんさいやー」

（注）Fアパートの単身者、相生通りに面した2階、相生通りでの炊事。水道・便所とも共用。

事例一⑪：共同便所のうじ虫対策も詳しく話してくれたおばさん（9月2日）

夫49才、妻32才、妻のほうは被爆者で現在は毎日病院通いだそう。甲状腺が腫れ上がっていた。肝臓も悪いのだそう。「会社に勤め始めて少しは楽になったんですが、それまでは土工で食べない日が2日続いたこともあります。そりゃー苦しかったですよ」

Fアパートの共同便所は、10数世帯で使っている。容量が足りなくて、川岸にドラム缶を2本おいてそこにためておく。市の汲み取りが間に合わないのだという。去年の夏には、うじ虫が2階の廊下にまで這っていたという。今年はドラム缶の中にたばこの吸い殻をほぐして入れておいたので、うじ虫がわかなかった。部屋が川岸に面していて、建て方が粗雑で火事・台風がとても心配だという。家賃3,800円。

（注）Fアパートには単身者だけではなく、家族で部屋を借りている例もあった。事例⑧の2階に位置する。水道・便所とも共用。被爆者で体調が悪い。生活保護。

これまでが調査を始めて1か月間の南側の地区の事例で、以下が北側の地区を調査した時の事例である。調査用に借りた家も、南の相生橋近辺から北の三篠橋近辺に移して調査を行った。10月に入ってからには疲れからか、詳しいメモはあまり残っていない。

事例一⑫：寺町への船渡しの人のおばあさん（9月5日）

Kのおばあさん（70才）は3人の孫を預かって育てている。昭和28年八本松から出てくる。おじいさんが1人で船渡しの櫓をこいでいたとか…お寺参りの人でかなりの客があったという。2～3年船渡しをやって、おじいさんが亡くなった後も息子が引き継いで1年ほどやったが、自動車などで客が減り工場へ

勤め始めた。昭和 28 年家を建て、45 年 5 月の火事で半分焼けた。家財道具などもほとんど焼失したという。

暇なときは子守をする。買い物へは乳母車に孫を乗せてスーパーマーケットまでトコトコ行くのだという。Y さんはおばあさんの娘で一つ家に住んでいるみたいだが、買い物も食事も別々、ただ洗濯だけはしてあげているらしい。

(注) 寺町への船渡し：当時は相生橋から三篠橋の間は橋もなく、ちょうどその中間地点、対岸の寺町に通う人たちが多くこの船を利用した。また、この家の北側一帯が昭和 45 年 5 月、調査に入る直前に火災にあって 46 世帯 165 人が被災した。



図 9 位置図 C (事例⑬～⑯)

事例一⑭：被爆で子を亡くし火事の家を建て直して住み続けるおばあさん (9月8日)

「私には男 4 人女 4 人の子供があつたんですがネ、原爆で娘全部と男の子 1 人なくなりました。おじいちゃんの外で裸のままで受けて…政府を相手どって補償の裁判闘こうたんですが、7 年前に死んで負けたことに一応なつとります…」

「おまけに今度は火事で全部焼けるし…」昭和 45 年 5 月の火事では柱だけ残つたという。息子が昔大工をやっていたので、その頃の仲間がいろいろな材料を持ち寄って住めるようにしたのだという。

「仮設住宅に入れちやる言うちゃつたんですが、息子が『住めるようにするけん、ここに住もう』言うんですよ。もうここに 15 年以上も住んで自分の妻も亡くしたもんじゃけん、離れたくないいでしょうネ。医者先生も学校の先生も『あんた一もう少し生きちゃらにゃいけん。子供ら(孫のこと…15 才と 11 才)のために、もうちとんなか生きとってやりんさい』言うてんですよ。あの子らがかわいそうで…」 「原爆や火事を受けると、人間、もう何も欲しゅうの一なりますよ」

ここにやってきた当時は、周囲は原っぱで竹藪もあつたという。

(注) 2 階建ての 2 階部分だろうか、今では位置を確定できなかった。被爆者、生活保護。共同水道からホースで 2 階にあげて炊事。

事例一⑮：火事後に家を建て直して暮らす兄弟たち (9月16日)

昭和 45 年 5 月の火災で焼失…母は牛田の仮設住宅に住んでいる。父は入院中で退院後は牛田に行くという。お姉さんは結婚して近くに住んでいる。

今は長男(20 才)次男(17 才)の 2 人が…たぶん柱だけ残っていたのを建て直したのだから…ひとつの部屋に住んでいる。「便所は？」と聞くと 17 歳の少年が照れくさそうに笑いながら「姉ちゃん近くだから…。いつかつけたい思うんじゃが暇がなくて」2 人も働いている。会社員とコックさんだ。

洗濯もお姉さんのところの洗濯機でやる。以前は借家だったが、今は自分たちが再築したので自分たちの家だという(土地が国有地だということになるんだな)。

男兄弟 2 人「2 人じゃけん、この部屋でええんじゃ」

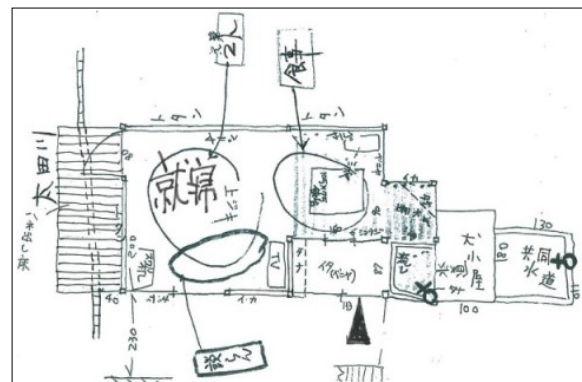


図 10 (事例一⑮) 兄弟で住む家

（注）この時話した少年も、今では60才を超えている。45年も前の相生通りの一コマ。

事例一⑩：船渡しの人のおばあさん（9月17日）

老夫婦の2人暮らしである。夫の方は失対<sup>5</sup>に出ていたが今は入院中とのことである。戦争前には〇〇組にいたが「かたぎに戻りまして大阪で仕事に出ていました。その時赤紙が来たんです」終戦後は満州で捕虜生活を送り、日本に帰ってから船に乗っていた。一緒になってから中深川に住み、共に失対に通っていたという。その後「これじゃどうにもならないということで鷹野橋に一間借りまして、そこから仕事に出ていました」

知人の紹介で、昭和30年ころ相生通りに来て家を建てた。渡し船をやっていた人の畑だったという。「その人がやぶのところを切り開いていたので、少しお金を出して譲ってもらったんです」そしてまた二人で失対に出て生活してきたのだという。

おばあさんは被爆している。宇品の海岸で商売をしていて被爆したのだという。100日わずらい、声が全然出なくなったこともあるという。その日、人を探して専売局あたりまで行くと、綱が張ってあってそこから先は行けなかった。

基町アパート「私は6～7,000円の家賃を払うのではありませんはい…」

（注）被爆者。知人の紹介で前住者と協議のうえ、空いた土地に家を建てたという典型例。専売局は御幸橋近くの宇品側にあった。



図11 位置図D（事例⑩）

事例一⑰：隣室どうし寄り添って生きるおばあさん二人（10月2日）

Tさんは韓国籍で、子供が6人いるという。天満町で被爆しており、現在生活保護を受けている。13,500円のうち部屋代に3,000円、ぜんそくの薬代に2,500円、残りで衣食雑費をまかっている。生活はきついとさかんに言う。

部屋は日当たりも悪く、風も通らず湿気があって昼でも暗い。つい入るときに「コンバンワ」と言ってしまって笑われた。「今晚は、じゃないですよ」と…。

隣室の85才くらいのおばあさんKの部屋は雨漏りで湿気も激しく、時にはTさんの部屋と一緒に眠るとか…。家具なども全部Tさんの部屋に置かせてもらっている。

「疲れるでしょう、そんなに気を遣いながらいちいち寸法を測ってきれいに書こうと思ったら…体を悪くしないようにね」そう言って煙草を一本、「吸いなさい」と言って渡してくれた。少し心を裸にして話してきた。

（注）周囲を家に囲まれ、狭い路地、湿気があり通風・日当たりが悪い。典型的な相生通りの家。外国籍の高齢単身者どうし、2人とも無職で生活保護を受けながら、日々を助け合いながらの生活である。なお付近一帯の南北の空き地は昭和43年、45年の火事跡である。

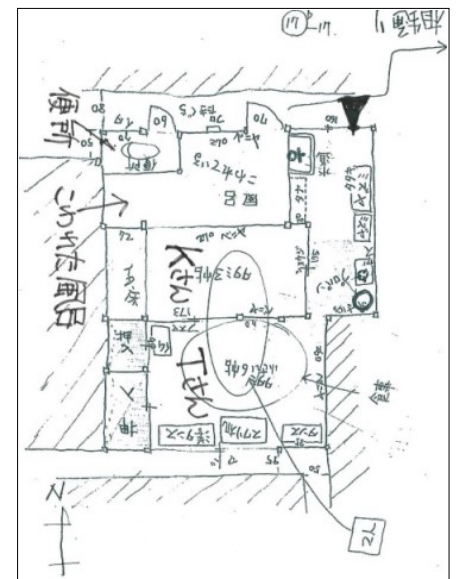


図12（事例一⑰）お婆さん2人の家

10 月 24 日、私たちは基町相生通りから引きあげた。私たちはこの 3 か月、何をしたのか、これから何ができるのか…。重い疲れと不安に包まれて、私たちは大学の研究室へ帰ってきた。それでも少しは楽しいこともあったし、個人としては意味が十分にあった。

何ができるか…このことは重い。

## 2) 読みとれた幾つかのコト

相生通り調査で訪れたその日のメモをこうして列記するだけでも多くの実状・心情が読み取れる。どこからどんな理由で相生通りにやってきたか。住みかをどのように求め実現させたか。どのような問題を生活の中で抱えていたか。再開発という現実は何を感じていたか。そうした中でどのような思いで生活を営んでいたか。これらについて若干のまとめをしてみよう。

**前住地**データからは広島市内 204 世帯（54%）広島県内 69 世帯（18%）広島市周辺 40 世帯（11%）と圧倒的に近辺が多く遠方からは 5 分の 1 にも満たないが、被爆以前にさかのぼれば遠く朝鮮半島や沖縄からという人に出会うこともあった。来住理由であるが、就労に便利だから 107 世帯（28%）親戚知人友人がいたから 87 世帯（23%）立ち退きで 50 世帯（13%）が続く。事例の中でも都心部特有の職について糧を得ている人や前住者を頼ってやって来た人の話を聞くことができた。来住理由での立ち退きは、戦災復興の区画整理とか太田川河岸に建てられていた住宅の撤去で立ち退きを迫られたといういきさつがあろう。そのたびに相生通りに住む人たちが増えたと聞いている。



写真 5 もとまちノート

当地区にやってきた人たちの多くは、事例にも述べられているように河岸の適地を見つけて自分で家を買った。しかし中には既に営まれていた木造アパート（F アパート等）に部屋を借りて、単身あるいは家族で住み始めた人たちもいた。

相生通りの人たちは生活の中で様々な問題を抱えていた。**被爆世帯**…データ 393 世帯のうち 132 世帯、3 分の 1 が被爆世帯であった。事例でもいくつかその話を聞いている。**国籍**…データ 374 世帯のうち 78 世帯、5 分の 1 が外国籍であった。何らかの差別や言葉の問題を抱える中で助け合いながら暮らしている人たちに出会った。**高齢単身者**…57 人（約 15%）の単身者の多くは高齢者（平均年齢 56 歳、男性 24 人、女性 32 人、不明 1 人）であった。事例でも何人かに出会い、それまでのいきさつや思いを聞いている。**貧困・生活保護**…「生活が苦しい」「生活保護の収入だけではとても…」という話を多く聞いた。事例では具体的に金額を挙げて話してくれる人もいた。**相生通りの火事**…相生通りは木造バラックのせいか火事が多く、延焼範囲も広い。以前まとめた図面（『都市住宅』7306 号）にも 6 度の火災記録が記されている。事例でも昭和 37 年と 45 年の被災例を聞くことができた。**衛生問題**…事例では日当たり・通風の悪さに加え、共同便所のうじ虫対策など下排水問題を指摘する声があった。

基町再開発との関係で忘れてならないのは、高層アパートにはなじまない職業と家賃負担のことである。事例の中でも「このままここで仕事を続け住み続けたい」「あの家賃では私は入れない」という声を聞いている。後編では再開発その後様々な理由で基町を離れた人たちのことにも触れる予定である。

まとめに際して、どうしても触れておかなければならないことがある。それは、こうした状況の中でも相生通りの人たちの多くは、持ち前の自立心・たくましさ・明るさ・思いやり・やさしさといった生きるうえで大切なことをきちんと保ち続けていたということである。何の保証もない河岸の国有地に、いわば〈不法占拠〉という形で家を建て、自分たちで街を作り、近所付き合いの濃密な当時でも珍しい人の気配あふれる生活空間〈共有空間〉を作り上げた人たちだからこそ、と思う。前述の事例（さらに基町／相生通りの調査全体と言ってもよいが…）から、その点を読み取ってほしい。

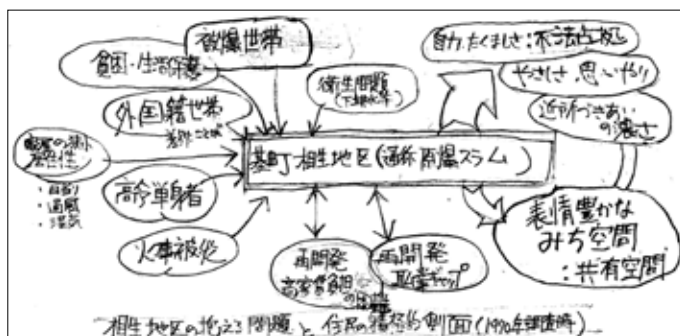


図 13 原爆スラムを巡る課題

次号の後編では、この街やコミュニティはどう形成されたか、そして再開後の昭和 54 年の追跡調査の結果について記述する。なお、著者の構成は、昭和 45 年実態調査を担当した大学院生の千葉、矢野、その当時研究室を構えていて、昭和 54 年追跡調査へつないだ石丸、同調査を担当した山下であり、そして、ここには表記していない多くの調査協力者がいたことを付記しておく。

#### 執筆者

石丸紀興：1940 年生まれ、岡山県井原市出身、東京大学大学院修士課程修了、広島大学大学院工学研究科教授を経て、現在、「㈱広島諸事・地域再生研究所」主宰、工学博士、技術士

千葉桂司：1945 年生まれ、広島県福山市出身、広島大学大学院工学研究科建築学専攻、日本住宅公団（現 UR 都市再生機構）を経て、現在「Kまち工房」主宰、博士（工学）、技術士

矢野正和：1946 年生まれ、広島県東広島市出身、広島大学大学院工学研究科建築学専攻、広島市役所を経て、ハウスプラス中国住宅保証（株）勤務後退職。

山下和也：1957 年生まれ、島根県飯南町出身、広島大学工学部建築学科卒業、㈱地域計画工房、技術士

#### 脚注

- 1 今日では、原爆ドームの北、東西方向に広島電鉄の電車が走る通りが「相生通り」と呼ばれている。本稿での「相生通り」は、山代巴編『この世界の片隅で』（岩波書店、1965 年）の「まえがき」や本文において表現されている。
- 2 『基町地区再開事業記念誌』の「第三章 基町不良住宅地区の形成」p5 による。
- 3 千葉桂司、矢野正和、岩田悦次の 3 名。岩田悦次は昭和 50 年実態調査メンバーの 1 人。1947 年生まれ、島根県大田市出身、卒業論文「基町相生通り」原爆スラムの構造」
- 4 大藪寿一「原爆スラムの実態 上・下」『ソシオロジ』14 巻 3 号、15 巻 1 号、社会学研究会、1968 年、1969 年
- 5 失業対策事業のこと。広島市においても失業者の救済のため、道路整備事業などの公共事業を実施していた。

#### 参考文献

- 1 大藪寿一「原爆スラムの実態・上下」『ソシオロジ』14 巻 3 号・15 巻 1 号、社会学研究会、1968 年、1969 年
- 2 集落構造研究会編「特集『不法占拠』」『都市住宅』7306 号、鹿島出版会、1973 年  
\*「集落構造研究会」は、千葉・矢野らがこの特集の編集のために設けた研究会である。
- 3 広島市、大高建築設計事務所編「特集『高層団地』」『都市住宅』7307、7308 号、鹿島出版会、1973 年
- 4 基町地区再開促進協議会『基町地区再開事業記念誌』広島県・広島市、1979 年
- 5 石丸紀興・千葉桂司・矢野正和ほか著「基町再開の追跡研究 その 1～その 6」『学術講演梗概集 計画系 55（都市計画・建築経済・住宅問題）』日本建築学会、1980 年
- 6 千葉桂司・石丸紀興・富岡康文「基町再開の追跡研究 その 7」『学術講演梗概集 計画系 56（都市計画・建築経済・住宅問題）』日本建築学会、1981 年
- 7 広島市編・発行『広島新史 都市文化編』1983 年

- 8 広島市編・発行『広島被爆 40 年史・都市の復興』1985 年
- 9 特集「広島(ヒロシマ)・長崎(ナガサキ)」『建築雑誌』1635 号、日本建築学会、2012 年
- 10 仙波希望「平和都市概念の生成と“原爆スラム”クリアランス:広島の後復興期における広報・都市計画を検討主題として」(東京外国語大学大学院修士論文)、2015 年
- 11 塩見鮮一郎『戦後の貧民』(文春新書)、文芸春秋、2015 年
- 12 佐々木俊輔「ヒロシマシティアパート観光案内」『早稲田文学』2015 秋(特集・広島について)、早稲田文学会、2015 年

絵・写真・地図出典

- 口絵 1 中国新聞社撮影・提供、『中国新聞』1965 年 7 月 13 日朝刊掲載
- 口絵 2 1970 年 3 月 6 日広島市広報課撮影、広島市公文書館所蔵
- 写真 1 矢野正和撮影
- 写真 2 集落構造研究会撮影、「特集『不法占拠』」『都市住宅』7306 号 p13 から転載
- 写真 3 同著 p14、p19 から転載
- 写真 4 佐々木雄一郎撮影、塩浦雄悟提供
- 写真 5 矢野正和撮影
- 図 1 「特集『不法占拠』」『都市住宅』7306 号 p 8 広島市地図をもとに筆者作成
- 図 2 同著 p 9 から転載
- 図 3 同著 p37 ~ 40 III・IVブロック平面図をもとに筆者作成
- 図 4 ~ 13 筆者作成